



繪新板

奇傳新話

四

伊 13
9.998
4



明へ伊3
番 2.398
卷 4

奇傳新結卷之四

能除邪惡貞烈度女全婚幸



人子勇壯あり自然乃性凡似く能義理と云ん義の
たぬに能義と云ふと云りて是乃婦人女子も勇
氣のあり備ひあり義理と云ふは義子ありゆか
あつたり附ひ勇猛乃丈夫も附ひありて是乃
らさあり只乃行儀と云ふは生死と云ふれ義子
立附ひ勇猛と云ふは是乃止むべし今昔
と云んぬ京都足利將軍義教云の治世にありて鎌
倉乃官領足利大馬院持氏々武法正しく執事上校
憲實朝臣賢明の人子て改事と云ふに指世乃中も



ありぬ其比先年家名絶かりたる小山永賢が藩士共
 八方に離散して二君に依りて生れ全ふ事あり若
 民とありて書子と養ひ又い工高とありて世に
 小者もあり已らぬくある中に橋津たきと中ら
 とい一人小山譜代乃勇士に高禄大友の臣あり不幸
 に其家滅亡し及ぶと二君に依りて其子の字
 高たあれたとえ餓死するも工高とありて生と養
 りと何乃西目ありて天下れ其子對せんや玉とあり
 てとららるも今と成るに孫念比企が谷
 の邊に浪定とて饑寒を志す書女も病死して一人
 乃娘ありと授育して愛毎月と送りりるこの娘は

書と号く十四五歳より及ぶと容貌おとれた藤く父の教
 にはさうく書に精進の業に巧みありあま
 らん長刀の術と練へて業をたもたれと深
 くしりて其の事と人子語るに温菜和歌よと
 乃儀正かりりや人近隣乃諸人も皆あまを
 其家の負儀ありとあられぬ同徳に兩具と高者
 に産四郎とあり若あり彼が姪ある者雷如に二歳乃
 年増ねれども生得種平れ性まで稀津らか
 たりて姉妹乃あり若子女業とるげとあり此産也
 とるる若性質好みに雷如が年長するに若
 其容貌乃整ありと意をていく数書と繕るを救回と

とども元來探ふ一さ吾女手にもゆれださう度しき
に思ひなほたえりて人とみく又なまの娘とま書にせ
まて讀むた書ゆに怒りともも其笑とあつらふ
媒人の者にむらう我己あれぶく宮たあふか
賤人より縁もと中あつとも其偶あつらふその
てまびい死あつらりにあつられども今浪士とあ
てかくれあつらふ貴家あれびんと見あふどつて我娘
と書とせんとももあつらふ今れあつらふ
士氣と縁と細人もかつらふ高貴農民とつども
家筋あつらふ者あつらふ縁にゆつて勢子あつらふ
あつらふ娘と書にゆつらふとも後來とあつらふ

不の 笑 威 我 意 と ころ して 向 方 にも 憤 怒 あり 母 さん
あつらひたのこ入と遠眼の涙と借しと誇りたるに妹
あつらひもその意と主極してあつらひる四高人あつらひ
と縁とのぞくともとく中あつらひる意もせんともあつら
りし止りぬおかし鶴屋八幡宮乃社修理あつらひる
厳あに倍し心遷宮乃日にあつらひて縁念中群集
あつらひる中あつらひる雷の中は住居あつらひる茶屋乃
子助九郎あつらひる容あつらひる建長寺に入学して
頗る文字とあつらひる武蔵とあつらひる風流浮花の態と嫌
ひ古雅と好んで商家にあつらひる志士あつらひる其日同士
の友と人と鶴屋とあつらひるまより野外あつらひる胡比奈

乃切ぬかりきりた寤言の任使四五人碎柱の頼に
 面目火乃まじく酒氣ありたりたる一人の志士や
 美葉の娘ととり面を争論乃終に志士も娘を
 かさひてさぬくにさるりとの方とも酔人一向
 たりありて是飛娘の世あつと理なきありて詞
 のどくまだ助九郎義氣ある者にく見られたる同
 道の友と双方をさめあつたりありひきりに任
 使ともつめく改子のつて一人でも相手れ多きを面
 白なる互に力となめ一勝得る方へ娘と世あつと
 是救乃つらかくはくはくかかるとえ来助九郎願力
 量もあつと志士相譲て二人と投倒しをさるるを

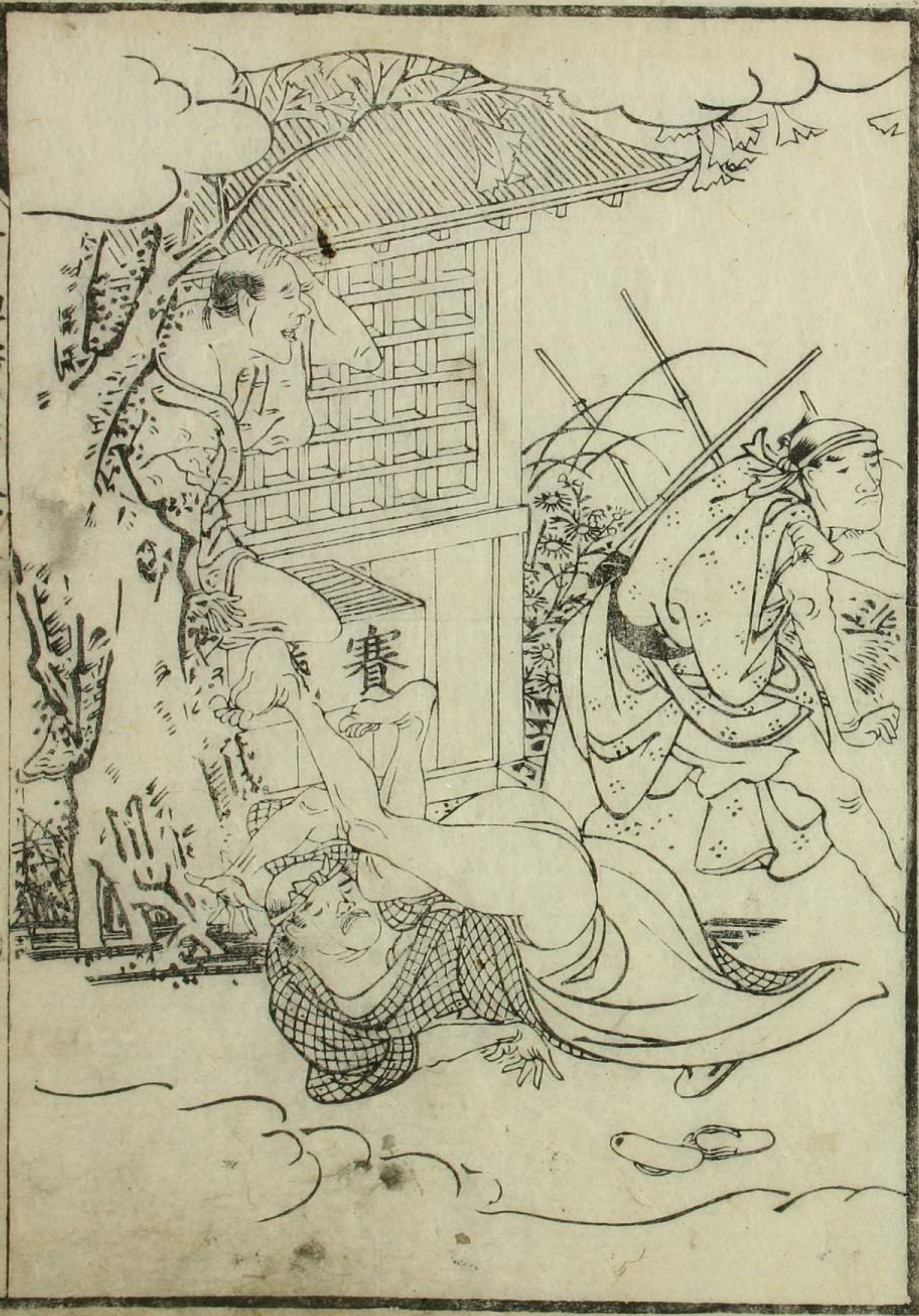
ざんば彼志士志士は恨む且其をさるは感一必意一時の
 たりありはく者にもさつたり選恨もあつたればた
 ぐい子相造してさつたりと利害と説き
 さるに任使ともと碎も醒あつとさく和儀とさ
 皆立つれんきま志士親子助九郎にむらてはとに
 石附の災難兩人共志士悟きあり一不法うねる方人
 大恩謝一がとと述る家に助九郎おつらて懇懇
 乃謝言うらて入ありたの志共一旦和解多き
 入りや同れとありて守りもあつとさるるを
 さあれんえ我家まで同りつと共う人ばく
 宿をたくりあつとせんと深切に申れを彼志士感謝

にたゞはん是弱同乃の儀あれは誠朝子あまの由同乃
つふふとと是より助九郎とはれどらて雪の下彼
が室へつり見れを大室に極乃豪家とらんそ
男女あまのあり助九郎親子と誘引してさうさ請
トをれを助九郎父助九郎夫婦も立出て丁寧にも
てかきれを彼を士も何となく感費して今日不
慮の災難御子息乃恵にゆくとゆわくのさあは
是中そ同乃子のあつり者あすてかかれゆく世
話子のあつり胸中れ謝辞口上は速かしくとさぐ
く話話し食事ととて彼を士助九郎にむら
名案も面目かたれども某いえ小山家の片下福津

を善と申去あり主家滅亡乃後二君に侍るにわ
一人の娘と飄蓬して貧困と志のさあぐと居りゆたの
ありさぬゆかくれおとれ御某志にわひの謝恩もは
くはさちちうあく是のそ残恨子たえたと悔乃
及とありゆかせんを助九郎大子たえとく小山
家れゆの某代々大恩とうけし者にさうさ年々
あく某の御子住居さうさあくともを某はととら
に轉宅さうさね御家の断後何やとる残念に存せし
不其御家の忠臣福津及にゆかせ御家の御
奉えともあらんあれを已れ某子御心屋あく某用
某父子承りゆべしと懇懇子速かれ福津も福津

高き多くは傍事ありと人ども何事も他家の恩と
あり又ハ農商とありと主恩と思ふ者一人もあ
しれとらかくれどくありに生る屋父子主家の四
と忘れど某までくかくれどそれ感謝ありまた
某先年朝夕と申すは生涯心よかふいとある人
乃娘の何とぞ所世話とみく所下申末の官仕
アとも又家筋ある農家高家ありともさうは
安むして是はゆら〜大悪のく是のこ控又たの
とふれ助ち出の夫婦助九郎もあれと信しきるに
あらが母七旬有餘ありが立知く對面してさうら
連合先助あらハ悪の所は稲津石見屋と後才の縁

ありて在鎌倉乃歸ハ時々後沢の客入所とらねあり
秋とも志〜所物か〜ありなり不附乃變は
所家も滅〜所家中もら〜にあり仍ハ悪の
所家もつらにやと尊り〜めさ〜どもある者
事ハ心子から〜が今日子供〜乃所お語り〜に
のひまた〜の立出由目にかりゆと候子〜てか
アきるに稲津も〜さ〜ある〜思らば横手
て海とに〜く〜れ所お語り心子〜ありぬの
ぬ縁ありて不思議は助九郎屋の所世話申角
合きるぞ嬉〜れと且泣且喜びて家内各悦び
ととあえらるる母稲津子むら〜水息女の所



奇傳新話卷之四

古今奇談卷之四

とて羨靡にして端は乃仍候れども入ゆ御老等
心かり我身よきとてさる一奉らぬ孫ある助九郎
高家になりとくども一差をある者あれを今日と
吉日やとく何とぞ孫が妻女に終りおは御縁もか
さありは上のあんどみあらんやとていひてさる子
助ちる主婦もともくになんい求められを福津ち子
よりさびてれとより浪療の身か聲とあふぶのそ
にく士類農高の足別ふ一助九郎乃差を士類子
もゆきあり子万統忌かぐろ只を負家に人とあり
たる娘和熟乃やとてそのこあがつる形とあふえ
られを助九郎も赤面して万一父母の望にまうせ御

息女と終りあをむ望は上を一とやり家に雪女も
たのこあげにさうつむき居たりあははく何み
かくお徳さるゆりきんを福津もよりさび子と
ぬけうよ物束あり娘の進トさあくども自ち養へ
貴家よりえつさるありてい存意あはる負孫へ
天ありつさるもゆるあふ一貴家の元はさるよ
つて天命れ負孫とあさるたのこれ私あり某は
某さるにく生涯へ饑渴にもなるまじと善比を
とあひあひて娘ははきく福津へ我身よゆり
は耐先ごんく雪女に枕心あかり一雨具高小差四
席はよりとほえん歩いて嫉妬の情止ごく某種屋

乃極其切敷して恨とらるるんと種々工夫あせども
其の根と云は類とみくまうくある吉田傳隆
とらるる醫師ありえ来吉田要人とらるる浪士あ
るが性年鳥居檢校とらるる富家れ盲人とらるる
ありせ鎌倉中へ高利乃金銀と借して其利倍によ
つくも家とといへく金銀と云く驕奢にせ
詠人の雅美となりたり其世詠世要人一人まで八
方とせめえりてあまはよめく刃上と威却する
者多うりなれを公道より吟味かり鳥居吉田要
人傳隆と云は根とて鳥居の宰死一要人の國にかまひ
はくたのさ遊放とありは要人大膽者に云く即座

に根ととりれく前齒二枚とらるるて醫と云
鎌倉の政任せりやうさかりのをれをとれと云く若
もあけきと肉とありとらるる若の婿と云くありは
傳隆と云く四郎が存念がゆひく我とらるる若
て茶屋と福津が縁と破らんや堂中たありと
つひられを去四郎と云く若とらるる若と云く
我はあつされよとらるる若と云く其身美と云く若
て供人と云く若と云く若の下れ茶屋と云く若と云く
うぐりきるに見世乃手代其用と云く若と云く彼
若の自分相おの茶屋の中若か若と云く別室に云く
中た一といひなれを去若と云く若と云く二階へ傳ひく

此よりしてゆくと、のえあふるべき茶葉のつらやと同
きるに之毒乃一種砒石斑猫乃類五六種とのごとき
まをを老手代眉に皺とよせしむかきまぶせし毒茶
膏のひゆる玉下れ制禁ありまくれども病疰にん
て是と用ひて切あにんく其種をいおあん
とくども其病疰所用ひ方ありとくけ龍文請
取の上賣ゆるが我家れ法度あれを其れゆひさ
知あつバ師のぞこれ茶葉所はしやたぐいと書
れを醫師おあつて念の入るるゆまゆ人にこそ
ひとるに龍文だよりやまらなり人の家の窓の
龍文とまあつねど其うけと述べれを其茶と

得るゆあつたは是淑くお語りあはれり某々言
田傳隆とつる醫師あり我近隣比企が谷に福澤氏
乃浪士のりい娘當年十七歳容貌秀麗にして今や
鎌倉中に比較あるゆかきまらにけ娘幼年より異
病あつて痛背に限乃おとれ白毛數根生トその
毛針乃てく白猪乃毛に似たり抜されども翌日又
生れ且腰腹患急に鱗と生とて穿山甲の芥子ひ
とく父是と熱ひく神子いのり名家れ醫によ
つて種々療用とほくして八九才乃ころよを全く
瘡親子よりらびにまは成人にまらひいけり
もかうりらふかを年相應乃縁談さるる父もを

あまご歎喜一きりその夜より背上の白毛股をの
隣形多く生じて其やういふほどに妖怪乃ぶと親
子多げさかふ一こさ母ぐに療治あせども一息の志
か一さきにすつゝ実にはわらわ老人不詮あま天刑の疾
形病忘とわらわ子述く縁と断んとせむ異病と世
あらわたり打て控んと歎きどもいふ子れ情をすこ
をばあふびと密子某とたのこそ毒殺と行ひあを
又病乃名もわらわれば縁説乃先も恥辱かれば日
比乃怒友ひとくまたのこ入る落涙の上まよれし望
わら果もとの難淡とさる一やり家傳に又病とや
と毒流乃奇方あり其説著一とくとも我のまご

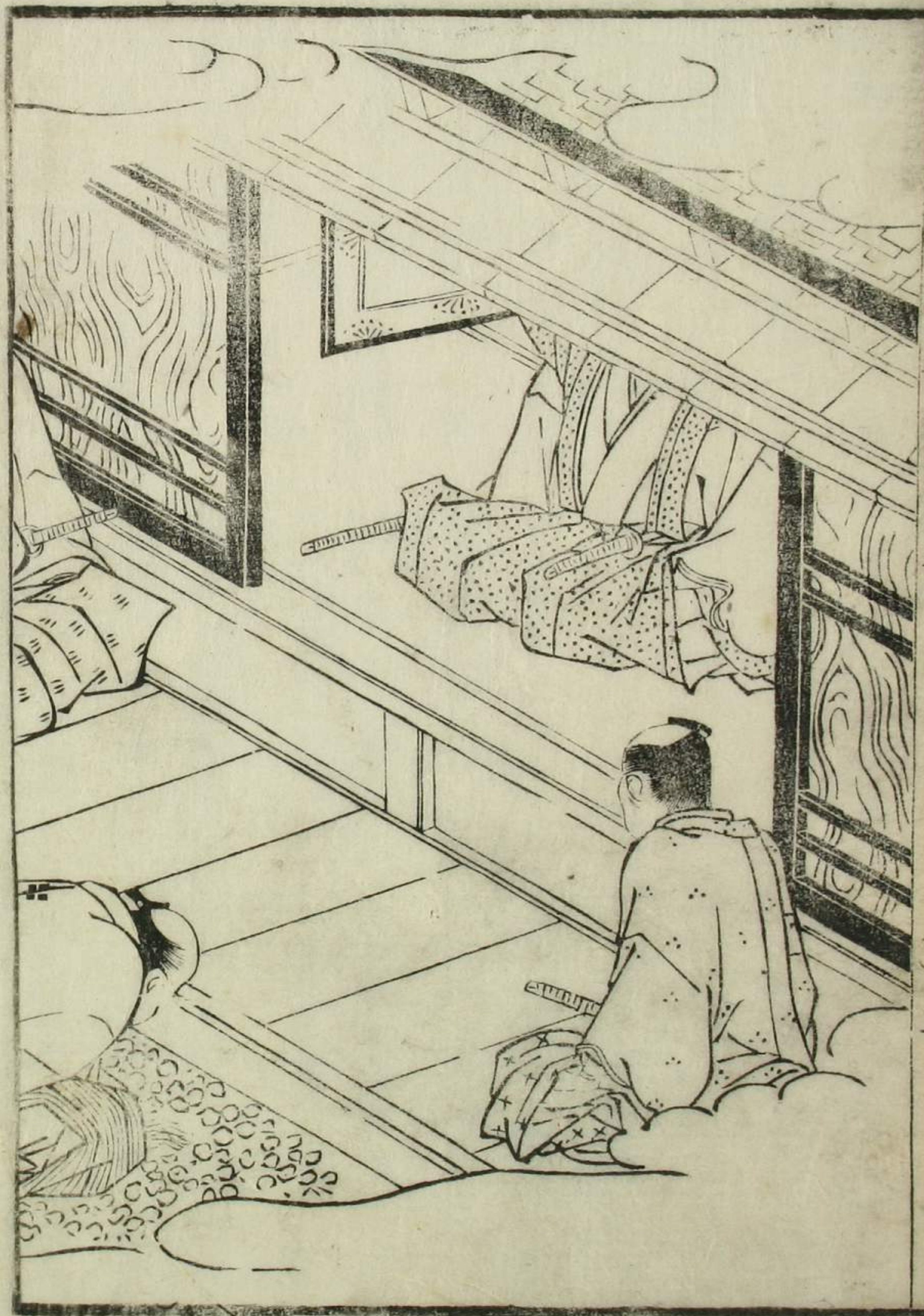
これとやとこさ娘と殺さんと覚悟の上は一療治
あまご一と説し合せ其某の内は木の教員乃毒業
あり故子此業種とわらわあかかこふ他言を利
わらと辨とわらいて語りをれを子代も大子孫さ
さるれ縁あふる愛液一集るべく一と要子入つて助
ちる父子に其物語と告きるに親子も勤結あら
か助あふ思慮あつる去にこそ偽あり不吉女に執
心あり若に殺れさるればよめて折家との縁と断んと
の奸計ありいふんとあればは醫師橋津氏と怒友乃
ゆいまういふ折家との縁説いよくまご一其異病と
療治乃毒業と折方にく顔く其病忘と語りとの説

猶現然たりとく取り届とらん茶種奏法ん
り説文とらんくきゆとと命トれば身付たり
げぬ茶種を引く是れ後一説文と請ふと傳
隆いゆり志んり福津親子いけり後にもあるに雷女
い助九郎が人品一筆をあるに一公一私に向い婚姻の
財節とゆるさびるに一夕老四郎が姪ある志んりて
お詰りれ序に密子ヤルい叔父かぐろ老四郎君子
無善して其事あつとと憤りあさぬく邪多子
いられく同教乃吉田信隆とつり醫師とれと志んり
病あつて用るとい法とて書れ下乃茶種をより志
あま毒業と賞めれり我身あ人の密教とせひく

大子孫と君と姉妹乃ちあまありて包んもなまあ
又悪人にもせよ叔父の逆子述るれも道あつた志んり
せん角やせんと思ひねれども思ひあつた志んり
破縁とあり又毒殺乃難にも隔りのらんりれり
さらん密子告あつとるを涙子くれて詰りたるに雪女
胸裏さるんもさるる深切乃秘志れごと
娘一は縁説乃熱不熱ハ自然の事あればあつと
恨みあか一老四郎及乃西竹父に七詰りまると志んり
く挨拶して彼女と御いね翌日十七日大氣明朗
ありられを雪女父子向い今日乃天宗長閑まで因
もか一初瀬の観音詣でるよりとよみれたるお

うゝぐさ我志居りよりよくも公づきせむや用意一
て立出たり其跡はく雲女女童と稱して是は
中継りなる毎度御女と稱り御返事にも及ばざり
が御目にかかり御返る中夜より只今より此邊にゆき
ちよと西出ゆりにと申送りなるに是四節大子と云ひ
に仙家に入らる公はく衣服と改め笑とみぐれとるお
も是のくごてありんれを若女ハ早斐といふくたき
かけして長刀の鞘とてらう一小腹よりいさこ立居り
是四節張ひいでりあり袂はやと同よ子若女打笑
ひく自にあり病名と云く縁造破らんせり
計ありたり危懼せよといは右よりゆりて云る

に是四節魂天外子死んぐありて發せ迎出ると退
つめて後の股より腰にかけて掛たり一に何れか
たまるべきうんとと倒ると其後首打落し血長刀
提て一街乃司と云る者の宅にあり静子始終と語
て是非ありと憤りなる是は居を手にくきりて
毎り御世話なぐら公も之新くありて一父なる
他ゆして存せざらるあり方一若者は静子行擔
あつて名や角の御挨拶あつて是は御女と
云はくと神女と云はく義藤の娘乃勇氣変然
なるに御司大子感嘆し發入る振也公安れ早
速云之新く一と云れども父御由ゆりあつての



上あつての言上か、先体息あれたるに
雷女も落つて長刀の血を拭ひて洗ひて瑞穂
とて、生一居り間もあつた父なる支那りは教を
受く大子脱び角こそあつた事ありお方け
上の所世始よ云々之折えあつたべしと教をたか
神もあつた面及妻せむれを町役人共賞嘆して
は父あつては女あり教子武門のかげけしを神妙
ありと早速百連折えらるに雷の下れ助ちるも毒
菜賣るる醫師の教文とあつた折えらるに官目共
委細子園届けて其後捕まるとき、吉田傳隆とと
らえあり先稲津親子とあつた尋問らるに稲津

たつ始終と言上、雷女売四郎姪乃お諸は其
謀計と知り是れおくもに掛り人を殺したる老
生かぐらふ公卿もあつたやうにも所仕屋敷に
よ、穂子言上、一毫の臆さる氣及なれを官人
何とも其勇氣と称し助ちる方と尋問ふに醫師
ありて毒菜と求むに舟中逃る謀計あつたやう
る教文とあり賣渡し所居り上ゆり、稲津が
言上と符節と合せられを傳隆と引出してさび
あつた責問ふに降ぶる事あつた巧乃次賣る所
に教文たる教一と逃れを官司残り、書付に
て憲實朝臣、折えらるれば一件事已子落つて

アガさめて詮議子乃あぐらんと判断と令せしむるなり
うきものりく稲津親子亮四郎親政と呼ばれ亮四郎
信隆が奸謀不屈を極あり町人として士族の對し一徹
藩乃あはりありあまたんく雷女子にうきし其節
正しけれが解死人は乃だ切徳さるべし然るに稲津親
子に何のゆ構なく又亮四郎一人乃悪事あまの親政
強は由構あまの娘中候一又助右と叫びて毒
茶羹液一註文を新え知るる神妙あり亮四郎傳
隆が悪事毒殺の上稲津親子に構あまの上一最
初御東の母り雷女と叫ひたり助九郎書とあは下且
父方乃助九郎方合方請まれば御諾是を公あり其意

に信へ一玄飛ぐら助九郎妻の父あはれ隨分大城子仕
ださより命令ありなれを稲津親子助右乃天地と強
して悪惡と謝したる板吉田信隆より己前科と犯
穢念入立御り居位をたると一罷死刑とあはれど其
上子かゝる邪暴とあはれ人の執縁と破らんは云詰
道断の不屈重きれ科たらんは磔子あはれをヤハ
一穿屋へと引是らる熱人雷女が勇標と云傳えそ
美競とあは上の政乃正しれと悦合もる史より吉辰
と撰きて助右乃雷女と引たり助九郎が婦妻とあ
つゝ仇儼相討ひ弥益其家解懸學せらたるハ二外
安法一法神して強夢と号し刀劍の体と指南一際

あれを名山勝地と遊ゆして特奇に性情と述ぶ時と
して助成ありあり一夕話話して是と止めれば細細
て竟る天然と云く八十五歳に病死ありとあると
る編津が筈なりと云くはと云くはと云くはと云くは
とのが加わあゝる雪女が形ゆれふは孝道に厚
き勇氣の道に死かふる藤人のかゝる徳義と云くは
たる幸古も亦稀なり不孝にして高家れ婦を終る
幸惜ぐ一と時の識者嘆惜ありたるより話の傳へたり

奇傳新話卷之四終

